【第43回環境省との団体交渉報告書】

Ⅰ．実施日　2020年7月30日11時から14時（3時間）東京ＴＫＰ神田ＢＣ５階Ｃ501会議室

Ⅱ．実施者　　 当　会　 門馬会長　作本副会長

　　　　　　　 環境省　 斉藤博美調整官（中間貯蔵用地担当）　　栗田用地審査課長

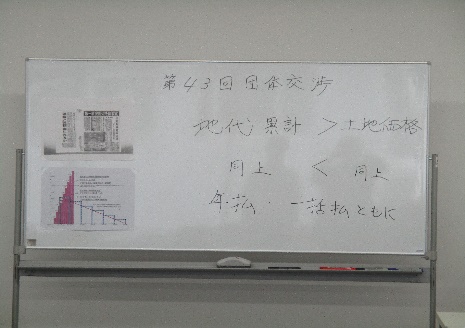
　　 　三田室長（総括課長兼務）　　悪原室長補佐（書記・ICレコーダー2台）

Ⅲ．配布資料　当　会・第43回団体交渉次第・要綱の解説初版本「推薦のことば」「はしがき」の写　　　　　　　　　環境省　　な　し

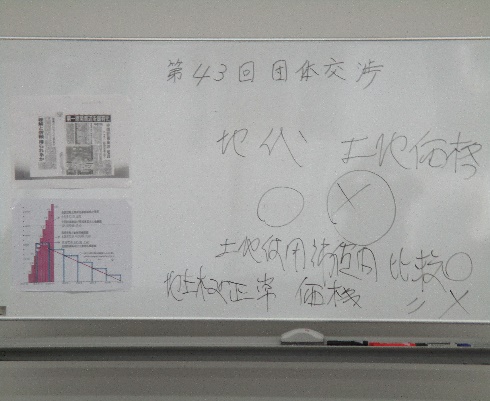
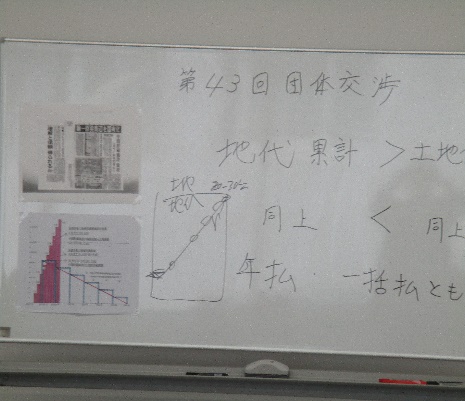
Ⅳ．双方の手持ち資料　要綱の解説書　各環境省回答書「今回はＨ29年9月6日回答書を使用」

Ⅴ．交渉状況写真と掲示板の状況写真「＊交渉報告書の中でも茶色文字で記載」

全面国有地化計画記事と比較表　　　　交渉状況　　　　　　前から悪原・斉藤・三田・栗田各氏



　戦後の地価（地代）上昇作図　　地上権の正常価格の矛盾を示す　　　　後半の交渉状況1時10分



Ⅵ．交渉内容「録音・録画で作成」「丁寧敬語等省略」「話し言葉一部変更」「（ ）書補足」「（＊）書後日記載」

次第１．用地補償「土地使用補償・土地価格」　２．事業終了に向けて　３．安心・安全の向上対策

４．クリーンセンターふたばの説明会開催要請　５．その他　次回団体交渉・環境省説明会日程

１．用地補償「土地使用補償・土地価格」（＊前回交渉を受けて事前に個人的見解はしないよう申し入れ済み）

「掲示板記載内容・写真掲載」

　　　　　　　　地代累計＞土地価格　　　　　地代の累計支払額は土地価格を超える場合も

　　　　　　　　地代累計＜土地価格　　　　　超えない場合も地代と期間によってありえる

　　　　　　　　年払い　　一括払いともに　　これは原則年払いでも例外一括払いでも同じ

会長：環境省はＨ29年9月6日回答書記載「要綱20条の２が補償の根幹で、土地使用補償の地代は土地価格を超えられない」との主張だが、掲示板にも書いた通り地代の累計額は土地価格を超える場合もあるが、超えない場合もある。（斉藤：頷く）当会は、要綱19条（＝基準24条）は地代が土地価格を超えることを許容していると主張している。

　当会主張に環境省は土地代を超えてはいけない主張なので、異論がある訳だ。

環境省：無言　「会長：よろしいか」「斉藤：ええ」

会長：要綱19条・基準24条細則11の5・6%では一定期間の使用では、土地代を超える場合もあることは明確にされている。これは如何か。また、掲示板の通り、期間と利回りで超える場合も超えない場合もある。地主の都合で地代の一括払いの話が出たときも、超える場合も超えない場合もある。

これは、地代の年払いと同じく期間や利回りや割引率の各条件によって異なってくる。如何か。

斉藤：（会長説明に何度も頷いて聞いている）・・・・・、まあ、やっぱり、あのう、先程の会長の話の通り期間による。

会長：私の質問は超える場合も、超えない場合もあることについてだ。如何か。

斉藤：それは当然そうだ。

会長：なので、基準19条・要綱24条は地代が土地価格を超える場合も、超えない場合もあることを予想・許容しているということだね。（再確認）

斉藤：何度も頷く。「会長：これは当たり前と言えば当たり前だ」はい、はい、頷く。

会長：斉藤氏もその通りだ「はい」と言った通りだ。仮置き場でも大熊町の賃貸事例も同じだ。

会長：環境省は要綱20条の2で（土地使用補償・地代累計は）土地価格を超えることができない。これが補償の根幹だと主張している。今も斉藤氏は頷いているが、いまもその理解でよいね。

斉藤：大きく2度頷く。

会長：よく（要綱の解説書を）見て頂きたい。要綱20条の2の条文は（地代累計が、土地価格を）超えることを想定しています。

斉藤：・・・・・。

会長：同条2項条文は「・・損失の補償額の合計額を超えるときは」と明記されている。

斉藤：2‐3度頷く。

会長：この意味は掲示板記載の通り、超える場合もあり、超えない場合もある。前段の同条1項で「土地の使用が3年以上にわたるとき」もあるが、「超えるときは」は地代が土地価格を超える時を、想定（許容）している。だから、超えるときは、環境省は、地権者に対して（申し出ることができる）ということになってくるね。

斉藤：2度頷く。

会長：なのに、環境省は超えることができない、というのはどういうことか。

斉藤：・・14秒・・。ここの要綱20条の2の言わんとしていること、補償額の総額は土地を取得した額を超えることはできないということで、それはあくまでも土地所有者からの請求で、・・。

会長：そうではなくて、（質問に対する回答ではないので遮る。

斉藤：土地所有者からの請求があれば、応じるということで、要綱2項は1項と違って、一応起業者からも一応請求ができる。ただし、それをそのまま、受け入れるかどうかは、土地所有者次第だということには変わりがない。

会長：申し出権にすぎないからね。

斉藤：はい。2度大きく頷く。と言うことの内容のはずなのだ。

会長：斉藤氏の20条の2の理解はその通りだ。（しかし、私の質問は）私は超えることができないと環境省は言っているが、要綱20条の2はダメだとは言っていないことについてだ。

斉藤：頷きながら、ダメだとは言っていない。

会長：許容している。

斉藤：大きく頷く。

会長：だから、環境省が言っている「超えることができない」と言うことと要綱20条の2項の条文は一致していないということだ。

斉藤：・・・。ただし、

会長：ただし、ではなく、条文で言って頂きたい。思い、ではなく、まず、条文で言ってほしい。

　ただし、以下の話はその後で、ゆっくり聞く。

斉藤：ああ、そうか。

会長：斉藤氏も大きく頷いている通り、要綱20条の２第2項の条文では認めているね。条文だよ。

斉藤：頷いて、そうですね。

会長：条文では認めているが、（中間貯蔵施設では）認められない、との主張が、次の（斉藤氏の）ただし、以下の話である。（ただし、以下の）説明をどうぞ。

斉藤：ただし、まあ、要綱20条2項の言わんとするところの趣旨は、やはり起業者としては、まあ、補償するにあたっても、うーんまあ、経済性、経済比較という目で、一応その補償内容を見なければできないよ、という背景があって、ええ、まあ、この要綱20条の2の2項、しかり、後は、まあ、他にも条項があるが、補償額が多額の場合、多額の場合も経済性を、きっちり精査しなさいよ、と、あとは、土地を返還する場合の補償についても、その返還する場合の補償額は、土地価格を超えてはダメだよと、まあ、同じこと、同じような趣旨で経済性をきっちり精査しなさいよと言う趣旨で、まあ、大きく分ければ、3条があるわけである。当然まあ、補償するにあたっても、当然この条項（要綱20条の2第2項）はこの通りなのだが、（土地価格を）超えるのも当然あるのだが、まあ、経済性もしっかり精査したうえで、対応するような形で行うというふうに考えている。

会長：経済性で対応しなければいけない、事業は税金で行っており、斉藤氏の話はその通りである。

　しかし、経済性は（要綱）条文を守って、その上でごね得などはあってはいけないので、（補償額）そこのところは多くてもいけない、少なくてもいけないという事でやって行かなければいけない。

その基本的な考え方が、要綱20条の2第2項で「超えるときは」と明記されているのだ。

　なので、今の経済性の部分は、税金であり、公共事業なので、その通りだが、（その前提は）条文を踏まえてやるということ（でなければいけないの）だ。条文のことは（私の話を）認めているが、（＊おり）条文の言わんとする事は認めている訳だ。超えるときは、と書いてあるから、だけど、環境省として今の部分の話は、経済性で、経済性から認められないと言う話であるのか。

　条文は超えることを認めているが、環境省の答え、Ｈ29年9月6日付回答書には「超えられないと書いてある」書いてあるね。斉藤氏の話のように経済性も考えて行かなければいけないという事は分かる。それは（補償が）公平でなければいけないからであり、（用地補償の）ルールに則った上での経済性である。今の（斉藤氏の話）経済性は、ごね得は許さないよという（事ではよい）ことだ。

　または、要綱に書いていない補償項目を補償する、ということは認められないよと言うことでの経済性は分かる。そこは如何か。

斉藤：・・・。まあ、先程の経済性のちょっと、補足になるが、一応、まあ、先ほど話した各条項、まあ、経済比較もしなさいよと言う趣旨に基づいて、経済比較しなければいけないというのは当然、あのう、当然私ら（環境省）も会計検査等も当然受ける。或いは、場合によっては行政監察をうける場合もある。まあ、その中で、まあ、その中で必ず、言われてくるのは、やっぱり、そのおう、同じ補償の仕方が、複数の接触者があるとして、最後に、必ず経済比較の分で、まあ、審査されることになる。ですから、まあ、そのう、まあ、税金と言う話も会長からあったが、これは国民から国民の税金を、それを予算に組み立てて補償する。当然、経済性をひっくるめて、総合的に判断して、この補償これしかできないと方針と言うか、考え方があるのでそれに基づいて対応している。まあ、そこから、そこの、起因して土地価格を超えてはならないという言葉がでてきたのだというふうに思う。

会長：思うと言ったが、思うではこまる。今の話は環境省としての回答でよいか。

斉藤：はい、それでけっこうだ。

会長：財務省が各省庁に検査に入っていることは承知している。それはあくまで、ルールの中での検査である。要綱19条に地代補償が書いてあるのに、財務省はダメだとは言わない。

　なぜならば、（憲法や）土地収用法のルールに基づいた補償であるからだ。

財務省がダメだというのは先程の補償項目にない補償や（ごね得に合わせた）釣り上げ補償についてである。違うか。

斉藤：何度も頷いて、そうですね。

会長：であれば、いま、斉藤氏もそうだと言ったので、ということは、この要綱19条の通りに補償すれば問題はないのではないか。

斉藤：ただ、もう一点、今回の中間貯蔵の事業については、承知の通り土地の買収、買わせて頂く、補償形態と地上権を設定させて頂く形態とで、それで、30年間使用させて頂くという2つの形態を設けて対応している。まあ、例えば、まあ、此間も土地を、私が話したが、土地を譲った、売った方と、後は土地を地上権で使用させて頂く対応の方がいる。結果的に地上権で対応の方、借地対応の方のいわゆる、賃料地代がその土地代金を上回るような形になったとすれば、当然同じ（中間貯蔵）事業内での対応として、それは如何なものか。土地を売った方の対応として、不公平であるという認識が当然発生するという考えのもと、同じ事業内の対応としては、不公平感を招きかねないという処で、まあ、そういう意味も含めて、土地価格を超えてはならない、と言う趣旨に立って、対応をさせて頂いているところだ。

会長：他にはないか。

斉藤：以上である。

会長：掲示板に書いた土地価格と地上権の地代が超えた場合の不公平感の話に対して、私は全くそうでないと話した。「斉藤：そうだ」前回交渉から私は斉藤氏の話と私の話を、福島の方や私の住まいの近くの方に話をしたら、皆さん私の言う通りだと言っている。要綱などのルールを知らない方が多い中で、地代と土地価格を比較するバカがどこにいるといい、そんなこと、環境省が言わないだろうと言われた。

したがって、今の話は、補償要綱の解釈（条文）からもだが、（私が聞いた）一般の方の感覚を、みても環境省の考えは間違っている。土地価格と地代は比較するものではない。前回、分譲マンション価格と賃貸マンションの事例で説明した通りで、それも同じく比較するものではない。

会長：斉藤氏は地上権が決まった後、今年の4月からきたので気の毒だが、環境省の考え方は根本がずれている。根本がずれている話をもう一つする。Ｈ29年9月6日環境省回答書をみて、これは環境省の本省で作成しているね。

斉藤：はい。

会長：当会は、要綱19条は長期（使用）も対象を継続して主張したが、環境省は団体交渉含めて、短期のみが対象（であること）を主張し続けた。その後Ｈ29年8月18日国交省に行って、長期も対象であると指導を受けた。

この回答書に正直に書いてある。「（長期も対象であるという）事実を確認しました」と書いてある。

三田：文章の通りだ。「会長：三田氏に注意（＊今までも環境省の文章の通りの回答に注意している）」

会長：この上から4行目までは、今まで何度も環境省と確認済みだが要綱19条は長期も対象であることを確認しましたという内容だ。そうだね。事実を確認したと書いてあるのだから。

環境省：・・・。

会長：そうだね。「斉藤：頷く」頷いて頂いたから進める。と言うことは栗田氏分かるか、要綱19条では当たり前のことであり、大原則である一定の期間には、短期も中期も長期も対象であるというこのことを、国交省に確認しなければ分からないという文書である。「斉藤：メモ取る」

これが、環境省の用地補償に関する能力であるということだ。

　事実を確認するまでは分かりませんでした。事実を確認して初めて分かりましたと言う、これは（そういう）回答文書である。それまで、我々は素人でしたと言っているのと同じである。

斉藤：・・・メモ取る・・・。

会長：続いて、掲示板記載の同回答書の基準25条の2（要綱20条の２）につながってくる。

いま、斉藤氏の話を聞きました。先ほど私が要綱19条、基準24条、同細則11の利回り5－6%でも示した通り、要綱も基準も超えることを認めていると話して、斉藤氏もその通り、と認めた。

斉藤：何度も大きく頷く。

会長：で、要綱20条の2も超えることを認めていること、を斉藤氏も認めた。

斉藤：何度も大きく頷く。

会長：もっとも文章（要綱条文）がそうなっている。「斉藤：2‐3度頷く」

そうなってくると話は早い。前回、斉藤氏から要綱の歴史を教えて頂いた。「斉藤：2‐3度頷く」

私も、その後歴史を再確認した。Ｍ22年土地収用法ができてから、Ｓ26年土地収用法ができている。

同法では、戦前も戦後もずっと土地の使用は地代又は借賃である。違うか。

斉藤：土地収用法の部分は、ちょっと、ものを見ないと（明確ではないが）基本は同じだと思う。

会長：ものを見ないといけない。先日（前回交渉）私が話したのに確認して来ていないという事か。

斉藤：今日はちょっと、土地収用法は（持参していない）

会長：では、確認頂きたい。持参した土地収用法小澤道一氏の逐条解説の写しを、（斉藤氏席まで行き）斉藤氏に提示し、同法1条で土地等の収用又は使用と書いてあるね。「斉藤：確認して、はい、はい、収用又は使用と（書いてある）」はい、そして、同法71条は土地価格で同法72条ではそれをどう書いてあるか。それを地代に読み替える、条文のページを斉藤氏に直接示して、「地代及び借賃に読み替える」と書かれているね。

斉藤：（同写し条文を確認して、会長の話にも頷いて、）・・そうですね。はい。

会長：（席に戻り）強制を伴う土地収用法で地代又は借賃であり、Ｓ26年の同法も引き続き地代等であり、それを受けて任意の要綱も地代又は借賃としたのである。その要綱は当然同法と一体であり、整合性を図っていることは斉藤氏も前回認めたところだ。

斉藤：何度も頷く。

会長：斉藤氏も今も頷いているからその通りだね。

斉藤：大きく3度頷く。

会長：その戦前戦後から要綱になっても一貫して現しているのが、地代又は借賃での補償である。

斉藤：何度も頷く。・・・・。

会長：だから、地代での補償はなんの問題もないのである。先程要綱（19条・20条の2）でも超えることも、超えないこともある。これは年払いの場合も、一括払いの場合も共に同じである。

それが、土地収用法でも、要綱でも大原則なのである。憲法29条3項の正当な補償を体現したのが、土地収用法であり、要綱なのだ。「斉藤：何度も頷く」異論はあるか。

斉藤：頷いて、ないです。

会長：ないですね。

会長：戦後インフレ率が100倍（になった）などの混乱期を経て、Ｓ30年代に入り今の福島と同じく復興という形で、取り組みＳ39年の東京オリンピックも見えてきたＳ36年からものすごい土地の高騰が起こっているね。頷いているが、録音でも出るので、声での返事も頂きたい。

斉藤：大きく何度も頷く、あ、はい。分かりました。

会長：この時を踏まえて要綱を作ったが、これも地代又は借賃である。なのに、何故、環境省は地代にできないのかということになってくる。そして、それは、掲示板に貼付した全面国有地化の話とも連動してくる。要綱後、用対連基準ができている。

斉藤：そうですね。

会長：斉藤氏は前回要綱では斉藤氏独自の考えで（大綱で）網羅的にできないので、（要綱だけでは）お手上げだと言っていると話し、要綱の施行について（閣議了解）の話とそれでは対応できないので（各事業者が内規を作れると言った）と言ったいろんな話をした。

しかし、要綱後の用対連基準でも（当然だが）土地の使用は問題になってはおらず、地代である。

斉藤：何度も頷く。

会長：（要綱などで）議論にしていたのは、電源開発等の鉄塔等の空間又は地下の使用についてと、補償項目での精神的な補償等である。当然、承知しているね。斉藤氏。

斉藤：大きく何度も頷いて、はい。

会長：補償項目やごね得が問題であり、地代は、全く問題になっていない。

斉藤：何度も頷く。

会長：だから、環境省は先程の短期しか対象としていなかったのと同じく、全く論点がずれている。

Ｓ37年10月12日用対連基準ができ、更にそれよりも細かい同細則を翌年3月7日に作った。

ここでも地代で具体的な出し方を書いただけだ。斉藤氏。そうでしょう。

斉藤：何度も大きく頷く。

会長：建設省の内規基準をいつ作ったか分かるか。

斉藤：そうですね。

会長：斉藤氏は前回、要綱はいい加減（大雑把）お手上げだから「斉藤：ええ」もっと緻密に作るために、だから事業者は勝手に内規を作っていいのだと話した。

斉藤：勝手と言うのは如何か。

会長：では要綱の趣旨に沿って、「斉藤：はい」作っていいと言ったが、用対連基準の前に内規基準を作ったところはあるか。要綱を作って、用対連基準を作って、細則を作ってその後に各起業者は内規基準を作っている。何故ならば、主だった事業者は用対連基準を作るのに参加しているからだ。

そうではないか。

斉藤：そうです。

会長：用対連事務局は建設省にあったね。「斉藤：・・」そうだね「斉藤：はい」

会長：建設省においても用対連基準細則作成（Ｓ38年3月7日）後2週間後「建設省の直轄の公共事業の施行に伴う損失補償基準（Ｓ38年3月20日）」「同運用方針（同年4月13日）」を作成した。用対連基準と内容は同じだ。

違うのは、表題部だけだ。ここでも地代又は借り賃は問題になっていない。

斉藤：何度も頷き、はい。

会長：なのに、なぜ、地代ではダメなのか。

斉藤：・・・。

会長：前回この問いに斉藤氏は事業が違うから、と回答した。「斉藤：頷く」

今の（地代補償の）流れは異論あるか。

斉藤：頷いて、流れに異論はない。

会長：要綱25条の2の解釈も、私と斉藤氏は同じだ。超えるときは、と書いてあるのだから、問題ないではないか。

斉藤：小さく何度も頷く、・・10秒・資料に目をやり・・まあ、超えることができないという判断は、先程話した2点で、環境省は判断している。

会長：環境省の判断だけではないか。

斉藤：はい、そうです。後は、例えば、あのう30年間、複数年、借りる会計処理について、まあ、当然、予算の裏付けがないと、年度の計画はできないという原理原則があり、ええ、30年間まとめて契約していて、年度・年度支払いする形態は、取れないという事務手続き上の関連からして、当然その30年間の金利（＊金額）を年払いしている、という形態は取れないと、対象外だという観点に立って対応している。

会長：いまの斉藤氏の説明、年払いの会計処理の話は、今までの皆さんが来る前の団体交渉で、撤回している。それは確認していないか。

斉藤：・・・。

会長：確認してほしい。

斉藤：まあ、正直な話、今の時点の私の解釈ではそうだ。

会長：今の時点の解釈ではなく過去の交渉経過を確認して来たのではないのか（＊前回明言を確認）

斉藤：でも、実際の事務手続き上はそうなのだ。それは内容的には、今も変わりはない。

会長：悪原さん、野村前調整官が最初にそんなこと約束していないと言って、結果は確認して私に謝罪したことがあったね。

悪原：はい、別件であった。

会長：そうだ、今の話と同じだ。だから確認してきていないのだ。

今の話は予算制度の話で、（＊地代年払い契約の場合）予算の組み入れをすればいいだけの話だから、予算の組み入れの環境省内の問題を、地権者に押し付ける話であるので間違いである。

　なぜなら、（仮置き場も年払いであるし、）国交省が年度予算を取って年払いをしている。

斉藤：国交省か。

会長：そうだ。

斉藤：首を横に振って、していません。

会長：している。

斉藤：少なくても、国交省東北地方整備局ではしていない。

会長：私は東北地整等とは言っていない。日本国内の話をしている。日本国内の法律（・要綱）の話をしている。

斉藤：民間も含めてか。

会長：そうだ。

斉藤：それは、承知していなかった。

会長：斉藤氏、それは、悪いが勉強して確認してほしい。もっとも、国交省以外でもやっている。

斉藤：年払いか、長期でもか、手をなかば広げて、その長期間の賃貸借契約での年払いか？

会長：年払いは、年度当初に予算を取って行っている。財務省に確認してほしい。

斉藤：年払いはしていると思う。私は、契約形態の事を話している。30年間の契約をして年払いをしているということか。

会長：長期だから20年以上だ。

斉藤：はい。

会長：だから、年度、年度予算を取って支払いをすればいいだけの話ではないか。

　それでは、なぜ、その責めを地権者に負わせるのだ。一括払いは責めである。

一つだけ事例を挙げる。福岡空港、国交省の所管だね。年度予算を取って年払いをしている。

Ｈ16年の新聞で、赤字なので民間計画化のなかで、地代は国が代わりに支払うと書いている。

だから、これが交渉のメインではないので、確認して頂きたい。

斉藤：先程の福岡空港だけか。

会長：そうでないが、確認してほしい。

斉藤：話は分かった。

会長：環境省として出来ない、と言う話は地権者に責任を押し付ける話だ。国内のルールに基づいた話で、環境省としてやらないと言う話と、出来ないという話は別だと私は話をしている。

（分けて話をするべきだ）

斉藤：年度ごとの予算は取れるが「会長：最初は取れないと話した」違う、予算の裏付けのない契約は不可能だ、と締結はできない、と言っており、（併せて）支払いも（できない）である。

会長：初めから契約は地代でするべきだと言っているではないか。

斉藤：身を前に出して、両手も前に出して、だからそういう契約はできない。複数年間にわたって（説明済みである）。

会長：将棋の千日手の話になっている。要綱（解釈）もずれている。前回事業用定借の話をしたが、権利形態（賃貸借・地上権等）の話は（今は問題に）していない。要綱19条基準24条に基づいた、適用をした手続きをして頂きたいと話している。それは環境省の地上権の正常価格はルール違反であるからだ。

斉藤氏は認めて来るな、と言われてきているので、ここで出来ないという（回答）は分かる。

会長：地代を超えている事例で、期間が長期になればと地代を超えることは先程認めた。

戦後、土地価格も地代も上がっている。（先ほどの）Ｓ36年の高騰、Ｓ40年代後半の上昇、証券バブルなどの上昇で上がっている。「斉藤：ええ」そうすると、上昇後の地代は短期間で土地代を超えている事例も普通にある。如何か。

斉藤：民間も含めてか。

会長：そうだ。東電の事業用地の借地（鉄塔等）でも同じだ。（四角鉄塔用地を登記簿・公図で調べれば借地しているのも分かるので証明はできる）

斉藤：全ての数を確認したわけではない。

会長：全てなどと話していない。（話の腰を折るような）揚げ足を取る話ではいけないので、掲示板に書いて説明する。

　「掲示板に土地価格の右肩上がり図を書く・掲示板写真の通り」

会長：右肩上がりの地価上昇を直線で書き説明する。これ（左下）が最初の土地価格から書いた直線のように20年30年で最初のところから、何度もバブルもあり右肩上がりになっており、（土地価格を地代が超えて）いるのが普通にある。数の話は誤魔化されるのでしない。

斉藤：ただ、まあ、あのう、私の経験から話すと少なくても国の事業、まあ、例えば国交省の事業、まあ、東北地整の事業では少なくてもその対応している記憶はないし、・・。

会長：話の意味がよく理解できない。

斉藤：例えば長期間のいわゆる借地、使用契約でもいいが、締結して年払いで支払っているのは、私の経験からない。

会長：あなたの経験だけを聞いているわけではない。

斉藤：それは当然だ。そうだと思う。

会長：いいか、日本の国内の法律と事例に基づいて話をしている。

したがって、国交省全体としてどうかと言う話をされるべきではないか。私が間違っているか。

斉藤：それは、（会長の言う通り）そうですけど。

会長：だったら、斉藤氏の狭い東北だけの話でなくて、日本全体の話ですべきである。

先ほど福岡空港の話をしたのは、日本の法律に基づいての話だ。違うか。

斉藤：ただ、・・。

会長：（先ず、）聞いた事に答えてほしい。日本の国内の法律や要綱に基づいてやるのではないのか。

斉藤：頷いて、それはそうだと思います。

会長：私も全て調べたとは言わない。ただ、東北だけや経験だけの狭い偏った話を、全体の話に置き換えて話をしないで頂きたいことを、強く申し入れていることを理解頂きたい。

斉藤：頷かないで、少しして、頷いて、はい、分かりました。

会長：斉藤氏の回答を了解して、はい。進めると福岡空港の話だが、当然、何倍にもなっている。

面積353ｈａで約3分の1が借地、年間地代約80億円、累計地代約1600億円とＨＰに掲載がある。

その他、国交省や日本不動産研究所の資料等でも（地価上昇などの）色々なものが出ている。

　このように日本全体の数字で見てどうなのかと言うことを私は話をしている。

私は事実を話しているので（斉藤氏も）反証は同様に（部分的でなく）全体の話でお願いする。

斉藤：黙って、頷く。

会長：斉藤氏の話は「地上権で決まっているから（を前提としている）こうだと言っている」だけの話である。「斉藤：頷かない」

土地価格を超えることについてもう一つ話をする。平成26年3月31日日本不動産研究所から環境省への報告書（その２）で説明する。（同報告書29Pに）要綱19条と基準24条の条文を掲載して、最後（31P）に地代一括払い約70%（68.18％）と書いてある。（これは）土地価格は超えていない。

　要綱（条文上）解釈上、地代は土地価格を超えないことも認めた。

斉藤：同報告書はＨ26年3月31日付けか。（斉藤氏は交渉最後まで見つけられない様子）

会長：ただ、環境省指示で年払いでなく「一括払い」になっている。

土地価格の30年で70%（＊68.18%）と書いてある。超えていないではないか。これは如何か。

会長：（インフレ・地価上昇・全国の事例等）理屈上は超えない、要綱（解釈）上も超えない。

斉藤氏同報告書が見当たらない為、会長が席まで行き報告書を１つ１つ確認してもらう。

斉藤：「会長から同報告書提示を受けて、30年間で、一括払いの指示、要綱19条・基準24条の記載で70%を確認して」頷く。

会長：超えていないではないか。これは如何か。

斉藤：同報告書を探しながら、・・・50秒・・・三田氏に資料確認「三田：これは地上権ではなく、地代の調査報告で、今回使っている（地上権）のとは違う」40秒・・・。

会長：（同報告書は）利回り5%なので、6%では2割上がった数字となる（68.18×１．２＝約82％）

　割引率等を請求したが、出したものが全てとの理由で断られている。しかし結論は超えていない。

会長：環境省の話は理屈の上からも、要綱も土地収用法も地代、基準細則でも地代で同じで、地代が超えることを認めている。要綱24条の2でも超えることを許容しているね。

斉藤：会長の話に1段落（＝・・・、）ごとに大きく頷く。はい。

会長：そして、掲示板の地価右肩上がり図を指して、今迄の地価の高騰からも（考えても当然に）、（超えているのは）普通にある。そうですね。

斉藤：斉藤：会長の話に大きく頷く。はい。

会長：そして、いまの報告書（その2）年払いを一括払いの指示を出した処は大いに不満だが、結論は超えていないではないか。

斉藤：・・・・・50秒間無言・・・・・。

三田：（斉藤に回答の了解を求めて）この報告書はそうなっている。会長の言う通りだ。

会長：私が聞いているのはその先だ。「その通り」は当たり前だ。環境省は間違いだと言っている。理屈の上で超えることも許容しており、掲示板を指さし、年払いでも、一括払いでも超える場合

も超えない場合もある。「斉藤：頷く」一括払いでは超えていないが、環境省は5%で年払いだと30

年で150となる。だから超えているという言い方になる訳か。だが、一括払いでは超えていない。

会長：斉藤氏、この報告書の70%と年払いの私が今言った150は同じ価値ではないのか？

斉藤：価値、はい。

会長：正確に言えば同じではないか。だったら環境省の理屈が通らないではないか。

　だから、それに対して、間違えているではないか、と聞いている。

斉藤：・・・・・80秒無言・・・・・。

三田：すみません。確認させてください。理屈が通らないという意味は地代でも土地価格を超えないのだから、地代でもいいのではないかと言うことか。

会長：私は同じことを言い続けている。Ｈ30年10月2日回答書でも、当会の考えを理解していないから、間違えて回答書を作成してくるのだ。斉藤氏如何か。

斉藤：・・・。今この不動研の話を基に教えて頂いた。これは、あくまでも試算、標準的な話でこの報告書ができているのかなあ、と感じました。

会長：日本の代表的な会社が1年間考えてまとめた答えがそれだ。（＊報告書の回答はない）

斉藤：当然これを基に土地の在り方、取得の在り方を決めている訳だが、ただ個々に判断していくと、確かに、会長が言う通り、超えるものもあれば超えないものもある。その利率によっても相違が出て来る。例えば、超えてしまったときはどうなのか。当然その土地の単価、まあ、期間は大体同じであるが、（地代の）単価、あるいは期間によって、超えることも当然のことながら想定されるところを取らまえながら、（超えた場合は）不公平があるのではないか、ということを話している。

ただ、ここに捉えると、土地価格を超えないところあるかもしれない。

で、確かに、制度上、賃料、地代で払うこともできるわけではあるが、中間貯蔵施設の対応としては、土地を取得する、後は、地上権で30年間設定させて頂いて、30年間の地上権の対価として、支払いすることを決めている、ので、まあ、スタートが間違えていると言う話だと思うが、まあ、そういう形で、公共事業の補償の考え方としては、環境省としては適正だと思っている。

　今後もこの形で進めたいと考えている。ただ、意見としては大変ご教授頂きありがとう。

まあ、そういうことで今後も対応していきたいということだ。

会長：スタートして間違えているということは、すべてが間違えているということだ。

斉藤：まあ、そう言う話は分かりましたが、（＊決まった事だから変えないという姿勢は変えない）

会長：Ｈ26年4月25日付けで福島県・大熊町・双葉町宛て文書と同年5月31日から6月15日迄の住民説明会配布資料までは「賃貸借を含めて様々な検討をする」から同年7月28日の環境省・復興庁公表・文書では「地上権一括払い」となり、同年9月29日から10月12日迄の地権者説明会で初めて「地上権価格・地上権設定対価（＝地上権の正常価格）」が示された。今までなぜ、賃貸借を含むから地上権の正常価格になったかの資料を請求しているが、示されないまま今日に至っている。根拠資料は何にもない口頭（決裁）だという納得できない説明だった。

いま斉藤氏もスタートが違っている事を認めているではないか「斉藤：頷かない」

会長：地上権と決めたからと言っているが、前回も話したが地上権をダメだと言っていない。

斉藤：会長の話は要綱19条による地代又は借賃の適用だ。

会長：要綱19条も土地収用法72条にもそう書いてある。

斉藤：はい、それは承知している。

会長：環境省として土地の使用を決めた時点で30年なので、土地の売買は地主の選択権なのだ。

　大分認めているが環境省が間違えていないという主張「斉藤：はい」の処は変わらないが。

会長：次の、事業が違うだが、事業が違う、のを要綱は補償項目も算定方法も統一し作ったのだ。

前回（交渉で斉藤氏は）要綱はざっくりとしたものだ、と言う趣旨の話をしたね「斉藤：頷き、はい」だから、考え方で変えてもいいのだと言う話だね。「斉藤：頷く」

　仮置き場とも事業が違うということだった。「斉藤：はい」

「掲示板に事業が違う、選択ができる（可）と書く・写真の通り」

会長：事業が違うのを統一したのが、要綱であり土地収用法3条ではないのか。

斉藤：・・・30秒無言・・・。要綱の作られた背景も当然そうで、各事業者によって当然その取扱いが、Ｓ30年以前はかなり異なっていたので、それで出来上がってきているという背景がある。

会長：要綱は何のために作ったのかは、いま斉藤氏が話した通り、事業が異なったものを統一する為だ、と統一した精神補償とか残地補償とかの項目もある。電力事業の空間又は地下使用とかだね。斉藤：はい。

会長：では、この要綱の解説書は何のためにつくったのか。「斉藤：頷かず、反応なし」

会長：要綱は補償項目も多岐にわたっていたので、統一する必要がある。その補償項目に基づいた補償の算定方法の統一この2つが（目的で）ある。「斉藤：頷く」

　その中で、土地の使用については明治時代の土地収用法から地代で変わりがない。

土地の地表使用（の補償）ではだ。「斉藤：頷く」

会長：事業が違っても地代なのだ。それが土地収用法でも収用裁決でも地代だ。

斉藤：（土地収用法1条）収用と使用、ちょっと、私の頭が追いつきません。

会長：日本全体の頭に切り替えてほしい。斉藤氏の経験と知識・能力から、すぐ切り替えられる。

中間貯蔵は我々から見れば高い放射能の数値だが、原子力発電所やプルトニウムの再処理施設等の特殊性と比較したら低レベルの施設である。

土地収用法3条では1号から35号まで列挙して書いてあり、これはさらに細分化して（その事業範囲・枠を拡大している）また、同法3条の条文は「なければならない」と限定して列挙してあるが、意味は、これに基づかなければいけないということだ。

同法27条の2は中間貯蔵も仮置き場も対象と環境省も認めている。仮設焼却場も当然同じだ。

斉藤：土地収用法3条だね。「会長：その27の2だ。見たことあるね」はい。

会長：同法3条を受け同法72条は地代である。事業が違うのを統一しようと言っているのだ。

だから、その大原則から環境省は外れていると話している。前回事業が違うのが要と言っていた。

斉藤：はい。

会長：もう一つ環境省が言ったのは選択ができる（特殊性）だ。言ったね。

任意の土地の使用交渉は常に選択権を（事業者・土地所有者の双方に）与えている。

Ｈ13年同法81条を追加したね。土地所有者が一定の条件で土地の買い入れの収用裁決を求めることができる規定だ。その結果は売買できる場合もあり、できない場合もありだ（ここでも売買と土地使用に分かれる）また、この前段で要綱の任意交渉でも起業者の貸しての依頼に対して、売買も選択肢に入っている。　だから、一つの土地で売買と土地使用が併存しているものもあるのだ。

（＊一例として電気事業用地などがある）そうではないか。

斉藤：はい。

会長：だから、環境省は選択権を与えているのが、特殊だと主張しているが特殊ではない。

任意の交渉で、土地使用と売買の選択権は当たり前に存在している。違うか。

斉藤：基本収用・取得、基本公共事業の場合は、取得する場合で使用との選択はしていないと思う。

会長：それは根本が全くずれているのではないか。そもそも中間貯蔵は政治家が入ってきて、掲示板に張った新聞記事を示して「全面国有地化計画でスタート」したから、根本がずれているのだが、土地の使用、地上権でもよいが認めた段階で、土地の使用なのだ。

斉藤：そうだ。

会長：土地の使用又は売買なのだ。

斉藤：はい。

会長：順番が違う。政治家は分かっていないから、売買又は地上権と言っているが。土地の使用があって売買も選択できるのだ。そんな事例は多くある。斉藤氏はその基本がずれているのではないか。

斉藤：ただ、私の聞くところによると、中間貯蔵は最初取得することで進めていきたかったのだけれども、先祖伝来の土地を手放したくないということで、最終的には処分場になってしまうのではないかと言うことで、一応、使用という形態を残さなければできないという状況があり、まあ、地上権の設定と言う話も出てきたと私は聞いている。

会長：流れは政治家が作った流れだから、間違っているのだ。もともと事業期間は30年だ。

30年後の事業終了後に国有財産から普通財産になる土地を売買にはかけない。

違うか。もともと30年間の事業だ。

斉藤：確かに使用なので、30年間、例え長期だとしても、前回も言ったが期間は始まりがあって、終わりがある。終わりがくれば還さなければいけないという基本姿勢だと思うが、・・・。

会長：それが基本だ、その通り。この基本に沿って要綱の考え方を、30年間だから、土地の使用を基本にすることが必要なのだ。道路等の永久使用は売買が中心だ。それに伴う事務所設置等あればそれは別で使用契約もできる。その永久使用の道路と有期限の中間貯蔵はその基本の考え方が違う。

（30年間の有期限である中間貯蔵施設の補償は）土地の使用が原則なのだ。

会長：（環境省は）選択権は特殊だと言ったが、特殊ではないということを理解頂いたね。

斉藤：・・・。「今まで頷いていたが、ここでは首を傾げる」

三田：それは起業者として、（地権者に）提示してＨＰにも明確に書いてある。

どちらも選べるとしているのは、特殊だと思っている。「斉藤：何度も頷いて聞く」

会長：それは、レベルの低い話だ。

三田：会長の話を聞いたうえで話をしている。

会長：ＨＰに掲載しているからと言うが、物事の根本と筋道の話からはずれた話だ。先ほど話した通り、Ｈ13年に土地収用法81条を加え、整合性を図る意味で翌年、要綱20条の2を加えた。

これは、事業者の都合と地権者の都合から、事業者が買取りの申し入れができると書いてある。

斉藤：はい。「会長：そこは（その通りだね）」はい。

会長：申し出ができる、ということは、認める場合とそうでない場合がある。「斉藤：そうだ」

結果として、土地の使用と売買も契約当初もこれと同じように、土地の使用に絡むものは交渉時に貸すのは嫌だけど買ってくれないか、はある話だ。「斉藤：そうだ」

会長：なので、ＨＰに書いたから特殊だと言う話ではない。物事の根本の話をしている。

だから、選択権を与えたと言っていることは特殊でも何でもない。違うか。

斉藤：ただ、特殊だと言っている意味は、例えば道路事業を所管している（国交省では）河川事業、砂防事業など様々あるが、基本土地を収用させて頂くのが殆どです。それと比較をして、中間貯蔵は取得する場合と使用する場合がある。2つの選択肢がある。そこの部分を取らまえて、特殊だと、

　この事業は特殊ですと言っている。

会長：斉藤氏が苦しいのはよく分かる。土地の使用の話で、選択権を与えている話をしているのに対して道路と河川の永久使用の話から入ってくる処に、斉藤氏の苦労がよく分かる。

会長：先程の事業が違うところも斉藤氏はよく理解している。「斉藤：はい」

事業が違うなら、原子力発電所と河川敷やどこかの通行路でもいいが、比較したらどうか。

（＊仮置き場の事業と中間貯蔵の事業の比較でも前者の方がその違いが大きいのではないか）

だが、要綱19条（土地収用法3条・71条）では事業が違っても同じで地代である。

事業が違うからと言って、「地上権の正常価格」にしてよいと言う話ではないのだ。

事業が違っても、「地代の補償」を要綱も土地収用法も憲法29条3項も認めているのである。

前回は、要綱に書いていない地上権の正常価格は閣議決定違反であることを説明した。憲法違反だ。

会長：環境省は「地上権の正常価格を土地の使用補償だ」と言っている。

（では）なぜ、土地の使用補償と土地の使用補償は比較できないのかは次にやる。

会長：前回交渉の宿題持ち帰り分「Ｈ29年9月6日回答文書の根拠を考え方に一定の期間に長期が対象の意に期間の概念がない」とありその回答を頂きたい。環境省の回答でよいか「斉藤：そうだ」

　１．要綱解説書の同19条の趣旨には根拠と書いてあるのになぜ、考え方と書いたのか

　２．1．と同じく一定の期間と書いてあるのになぜ、期間の概念がないと書いたのか

根拠と考え方は（その意味は大きく）違う。斉藤氏は持ち帰ると答えている。「斉藤：はい」

斉藤：これは、ええ、まあ、答えた方、内容は、地権者会さん、各会員に当然、あのう、説明頂いて伝達頂いている状況である。ですので、誰しもがよく理解できるように、まあ、そういうお役所言葉ではなくて、日常的な平易な言葉を利用して、使用して表現したものであり、決して、この要綱解説書の内容の趣旨と違えた表現を用いていると言うそういう趣旨ではないので、（この回答書の文章の）趣旨は、内容は同様の考え方を話している。ただ表現だけは、分かり易い言葉を利用して、見方、考え方と言う話をさせて頂いた。ですから、確かに要綱の解説書（19条の趣旨）のなかには、根拠と記載されているのは当然分かるが、分かり易い説明をさせて頂いているということで、そんな深い意味はない。

会長：斉藤氏から前回交渉で他の内容でも、一般の人が見たらどうかと言う話があったので、一般の方に見て頂いた結果は、環境省の回答内容は分かりませんと言う回答であった。

この回答書の4ｰ5行についてである。同回答書のただし、以下の記載内容はあとでする。

日本語として違う。考え方と書いてあるが、根拠はその通りやらなければいけない意味だ。

斉藤氏から「深い意味はない」とあった「斉藤：はい」斉藤氏だから、ここまで言って頂いたと思う。

とすると、この「考え方」は「根拠」と同じ意味だということでよいね。

斉藤：頷いて、はい。「会長：そうだね」はい。意味あいは。「会長：意味合いは（同じだ）ね」はい。

会長：とすると、これは要綱解説書の根拠を変えて、考え方と書くのは如何か。

　普通の人が見れば分かりやすいように書いたと言ったが、「斉藤：はい」全く違う。

次の「期間の概念がない」は如何か。

斉藤：まあ、これも、・・・。

会長：前回、斉藤氏から期間は始まりがあって終わりがあると明確に答えて頂いた。「斉藤:はい」

斉藤：で、何から話していいものか、まずは、あのう、要綱19条（-延ばす）の話で、この中には「期間の概念がない」と言う話はしているが、例えばあのう19条要綱の19条ですね、これは土地を使用する場合の、ま、根拠、ま、先ほど、考え方に変えたが、「会長：（笑）根拠に変えた」根拠と算定方法を規定したものである。その19条の本条条文には、そこだけ読むと、期間と言うものは、書いていないし、解説の部分にはでてきますよ。条文本文には期間と言う表現は入ってこないし、例えば概念とは何でしょうか、ということで、誰しもが共通に抱く認識、物事の性質に対する共通の認識、例えば、何々はこういうものだ、という認識であるというふうに考えているので、また、先ほど、（＊考え方について）一般の方への説明を踏まえてと言ったが、ああ、例えば、一般の方が見た場合、この（要綱19条の）条文を見た場合、あのう、主語が土地の使用だと思うが、そういう表現の中に、期間と言う言葉が思い浮かぶでしょうかと、万人が、ばん人が共通しておそらく期間と言う概念は、この本条、19条の本文からはないのじゃないのかという話を、この間（前回交渉で）、したかったのだが、いい表現（例え）が見つからなくて、ちょっと、ぼやかしてしまいました。

ちょっと、整理するとそういう思いだ。

会長：以上でよいか「斉藤：はい」いまの話で、先ず、本条要綱19条本文には期間という言葉は、入っていない（という説明だ）が、使用する契約では本来いつからいつ迄は、普通の人はその期間は当たり前に考えることだ。

普通の人は期間の表現が入っていないので考えないと言う話は、余りにも普通の人を・・。

斉藤：馬鹿にしている。

会長：馬鹿にしている。

斉藤：馬鹿にしているつもりはないが。

会長：いや、私ではなく、普通の人が言っている。私は斉藤氏の話を普通の方に確認して、事実に基づいて話をしている。「（環境省は）それは、俺を、普通の人を馬鹿にしている言葉だ」だって、土地の（使用）契約だ、土地の賃貸借契約だったら、いつからいつ迄だ、は当たり前だろう、何言っているのだ！ということだ。

　期間があるのは当たり前だろう！と言っていた。一人だけに聞いたのではない。

斉藤：頷かず、会長を直視。

会長：だから、普通の人が、そう捉えないという考え方が、先ずおかしい。それと、これは、（斉藤氏が着任前に同席の）3人には話したことだが、（期間の）概念がないというのは、斉藤氏、期間は始まりがあって終わりがあると斉藤氏が話した通りだ。「斉藤：頷く」さらにそれに「一定（の期間）」と更に明確にして表現した。それに永久は入らないと斉藤氏は話した。「斉藤：頷く」

しかし、「概念がない」となると日本語では永久も入るのだ。「斉藤：頷く」「期間は始まりがあって終わりがある」がその概念がないとなると、「期間は始まりがあって終わりがある（＊始まりも終わりもない）」この概念がないので永久も入る。だから、日本語として間違っていると話をしている。

斉藤：頷かず・・・無言。

会長：それを今まで、期間を信号機の例えで説明した。一定の期間には「短期・中期・長期」はあるねと聞いて「ある」と回答があり、信号機は「赤・青・黄色」は3色あり、これは色の概念がないとは言わないね、「斉藤：頷く」又は、3色の色の概念があるというねと話した。それはそう思うね。

斉藤：うん、まあ、普通の人から、すれば（そう）ですよ。

会長：日本語としてそうだ。専門家にも普通の人にも確認した。私は事実で進めている。

　そうすると、使用期間は短期・中期・長期だね。それを、「短期・中期・長期の概念がない」と言っているのだ。「斉藤：頷く」しかし、「短期・中期・長期の概念はある」ではないか。

短期も認め、中期も認め、長期も認めているのだから。

斉藤：頷かず。

会長：要綱19条の一定の期間の使用には短期・中期・長期が入るので、今の期間の概念がない（＊誤り概念があるが正しい）という話と同じなのだ、日本語として。「斉藤：そうだ」そうだね。初めてそう言って頂いた。だから、短期・中期・長期の概念はあるではないか。

斉藤：この19条の条文から言えば、ないと私は思う。

（見開きの解説本を触り）この解説まで読めば（入る）

会長：じゃあ永久は入るのか「斉藤：期間だから、これは（入らない）」入らないね「斉藤：頷く」

19条の条文からみたら、入らないという意味は不明だがどういうことか。

斉藤：例えば、ちょっと、なんと言ったらよいか、この間、ちょっと、

会長：斉藤氏の頭脳ですぐ説明できないということは、一般の人に分かりやすいようにこの文章にしたとの話だが、一般の人はますます分からない。一般の人に分かり易くするため、根拠でなく考え方にしたとの話もあった。話の腰を折ったが、続きどうぞ。

斉藤：概念の話からでよいか「会長：どうぞ」で、概念とは何ぞや、と言う話から深堀して話をすると、まあ、さっき言った通り、概念とはこれは、○○はこういうものだ、と万人が共通して抱くことだと、まあ、辞書を引けば、じゃあ、要綱19条の条文は、当てはめればどうなのかと、まあ、その前段でこの間ＮＨＫの番組でやっていたのだが、概念の話だった。概念とは例えば経験概念と純粋概念があって誰しもが学習も経験もしなくても抱く概念で純粋概念というのは先ず一つある。

あと経験概念、これは学習したり経験したりして思い抱く概念の2通りがある。まず、経験の概念だが、当然我々公共事業とか不動産業をしているものからすれば、ここの土地の使用の話を聞いただけで当然会長が言った通り、期間とか目的だとか、後は賃料地代の話、あとは返還の話どうするのか、そういう部分もパット思い浮かぶわけだ。ただ、ただ、一般の方々はやっぱり、学習なり経験なりの度合いによって、ええ、かなり、あのう、格差があります。まあ、一般の方々にあのう、問うた場合（要綱19条の条文の）土地の使用という主語だけで、ええ、例えば期間だとか、地代とか、あとは当然、思い浮かぶ人もいるかもしれない。まあ、もっとも、万人の人が思い描く認識、概念なのでしょうかね、ということで、ちょっと、クエスチョンが付きます。

斉藤：あと一点、じゃあ、ここまで。例えば、先ほど純粋概念、例えば富士山は山であると言う話は誰しも思い描くが、富士山は、標高はいくらなのだ、3376ｍの山だという概念をぱっと思い描く人は、やはり学習、経験したものでないと湧かない概念である。まあ、そういう概念の度合いについては、千差万別なので、まあ、一般の方々が概念としては、要綱19条に当てはめて考えると、19条の本文だけでは、なかなかその期間という概念は思い浮かばないであろう。ただし、我々、公共事業を行っているもの、或いは不動産業をしているものから見れば、後この要綱を最初からずーと見れば、この土地を使用する場合も定義があったり、あとは、一定の期間の書きぶりがあってですよ、後は権利の存続期間は要綱11条の解説にあるが権利の存続期間は一般に20年間という書きぶりがあったり、あとは、この要綱の20条の処これは空間又は地下の使用の処には使用の長期、使用が長期にわたるときは、使用期間20年以上に解してもいいと、ここではじめて期間・期間・期間という文言が出て来る。ということを見て初めて、ああ、この使用というのには期間というのは当然あるのだなあという、ことでこの概念を頂いた（使用）。ということでお話をした。

会長：話がよく理解できない。

斉藤：そうか。

会長：斉藤氏の話の方が、はるかに面倒くさくて分からない。

それは人を煙に巻くための論法としては分かる。

斉藤：いいえ。

会長：単純に期間には始まりがあって終わりがあるのだから、その概念がないという言葉は間違いだと言っているだけなのに、その概念のことばをさらに突っ込んでいった話をしている。

いまの話を聞くと最初の考え方と同じように、一般の人のためにこの言葉を使ったので、専門家が見れば期間の概念がないは間違いだと分かるという理解でよいね。読んでいけばそうだと言う話だ。

斉藤：そうそう。

会長：一般の人向けには正しいが、専門家が見れば間違えているということでいいね。

斉藤：専門家と言うか、研究者が見れば（そうだ）

会長：研究者が見れば間違えているということでいいね。

斉藤：研究者が見れば、この条文の中からでも（＊期間の概念ない、を一定の期間と読める）

会長：研究者が見れば（間違えているということ）それでいいね。

斉藤：頷き、はい。

会長：それで、最初の（根拠を）考え方にした斉藤氏の話と整合が取れる。

　考え方もそんな悪意で書いてはいない。「斉藤：大きく頷く」期間の概念がないも専門家が見れば間違いだと分かる。「斉藤：頷く」ただし、環境省は専門家向けに書いたのではなく、一般向けに書いたらこの言葉の方が理解しやすいと思って書いた。「斉藤：頷き、はい」そういうことだね。

斉藤：頷き、はい。

会長：わかった。よろしいか。

斉藤：もう一点、考え方と根拠のところでちょっと話をしてもよいか。

会長：個人的な見解は聞きません。「斉藤：けっこうだ」環境省の見解「斉藤：はい」

斉藤：中間貯蔵施設の調整官として、キッチリ話をする。

　ええと、（要綱の解説には）考え方と解説（＊19条の趣旨）には根拠と書いているではないかと、まあ、当然読んでいけば当然そうだが、ちょっとザーッととうして読んでいくと、ええ、（要綱19条趣旨の）この根拠及び算定と書いてあるが、・・。

会長：ざっと読んだと言わないで、ざっと読んだから、あのときはこう答えたけど。「斉藤：ええ」

言葉尻捉えて悪いが「斉藤：そういう事はない。一通りだ」

じっくり熟読して考えに考えて会議に計って答えるということだ。私も準備をして専門家と相談し事実を確認して本日を向えている。私も間違えて言ったら訂正し謝罪する。

斉藤：はい。申し訳ございません。

斉藤：改めて、前回の交渉の中でもキッチリ話をする内容の根拠やら背景などをきっちり再度確認して、次回の交渉で話すとメール（悪原氏からの口頭）で返しました。

その後要綱の解説も一通り、まあ、熟読、私まあ、熟読、一通り目を通して見ました。その中でこの根拠、解説（書の趣旨）に根拠と書いてある条文は、ええ、この19条の土地の使用に関する部分、後は、ちょっと遡るが、前の要綱18条〈鉱業権等の消滅に係る補償〉の趣旨、次には要綱22条〈漁業権等の制限に係る補償〉の趣旨、後は要綱23条〈鉱業権等の制限に係る補償〉の趣旨に書かれている。この根拠と書かれているのは4つしかない。

（＊正確には「補償の根拠及び補償額の算定方法を規定」とある）

　これはなぜか、という事でまた、もう1回読み直した。例えば19条の土地の使用の条文は、何を指して根拠と言っているのかと見ると、前段（第1項）の正常な地代又は賃料（借賃）を指している。後段は算定方法だ。

会長：先に、私が話した土地収用法の歴史・実態と合わせて要綱はできているから「斉藤：そうだ」そういう意味で根拠なのだ。土地収用法と連動しているのでそう判断している。

斉藤：で、要綱19条は土地の使用に関する条文だが、じゃあ、土地の取得に係る補償はどうか。

要綱7条〈土地の補償額算定方法の基本原則〉だが書きぶりはどうかというと、まっ、承知かも知れないが、土地の補償額算定方法の基本原則である。ここにも先程の（要綱19条の土地の）使用と同じように「取得する土地に対しては、正常な取引価格をもって補償する」とある。当然、要綱19条の土地の使用の場合と同じだ。正常な取引価格が正常な地代にとある。

会長：土地収用法も72条で置き換える（＊正しくは読み替える）と書いてある。

斉藤：置き換えるとある。（＊正しくは読み替える）

斉藤：だから、根拠と言っている部分は、要綱19条の言っている処と、要綱7条の言っている処とまさに、正常ななにがしの部分は、同じであると思って解説の処を見てみると、要綱7条の解説（＊趣旨）は補償金の算定の基本原則（＊補償額算定の基本原則）と書いてある。あれと、あれと思ってそれは何故かなと、1つクエッションが付いた。解決（解明）はしていない。で、先ほど（要綱22条）の漁業権の制限の話、要綱22条の漁業権等の制限に係る補償にも、趣旨に根拠と出ているが、要綱18条の鉱業権等の消滅に係る補償の趣旨解説では補償の根拠がでていて、要綱23条の鉱業権等の制限に係る補償の趣旨にも根拠は出ているが、要綱17条の漁業権等の消滅に係る補償では根拠が出ていない。補償額算定方法も（ない）

斉藤：こういう統一性がない解説というのはどうなのかなあと思って、すなおにクエッションが、でている。で、他の条項も見ると、例えば、まあ、一つ一つまあ、敢えて話すと要綱10条の〈土地に関する所有権以外の権利の補償額算定の基本原則〉ここには正当ななにがしという表現があるにもかかわらず「根拠」の表現はない。

（＊趣旨には「‥権利を消滅させる場合の補償額算定の基本原則を規定したもの」とある）

　あと要綱11条の地上権、永小作権及び賃借権の正常な価格も同じ（根拠と書かれていない）

（＊趣旨には「・・算定に関する規定」とある）あと要綱12条の使用貸借による権利に関する規定でも正常ななにがしという表現はあるが、解説には根拠という言葉は出てきていない。（＊趣旨には「‥場合の補償額算定に関する規定」とある）あとは、要綱20条の空間又は地下の使用に関する補償にも正常な賃料（＊趣旨後段には「土地の使用料」とある）という表現はあるが、解説には根拠は出てきていない。（＊趣旨には「補償額算定に関する規定」とある）

斉藤：根拠が出て来るのは先程の18条・19条・22条・23条だが、これに統一性がないのは、どうなんだろう、よく分かりませんでした。

会長：分かってから、話してください！

斉藤：すみません。だから、・・。

会長：斉藤氏が分からないことを私に言われても困る。

斉藤：それは私の中でも、・・。

会長：斉藤氏は国交省にいたので、いろんな専門家も知っているだろうから、整合性なり、いまの（クエスチョンの）話を確認すればいいだけではないか。

斉藤：で、今の不統一感、・・。

会長：いまの分からない話を前提とした結論の話を私は聞くつもりはない。

斉藤：ええ、じゃあなんでこの考え方にしたのかなあと確かに平易に分かり易い言葉に置き換えて。

会長：一寸、わかった、長い話で結論がよく分からない。この要綱解説書は、日本語として考え方を書いてあるから、先ほど一般の人が分かり易いようにと言っているが、「斉藤：はい」根拠と考え方は、日本語で意味が全然違うではないか、と話をしている。環境省は、悪意はないというが、悪意があって確実に間違いを認めたということだ。いまの話は、根拠と期間の概念がない話は、（斉藤氏は）なんだかよく分からない、分からないと言う話だが、答えを言ってほしい。ずうっと聞いていたが、何のことだか分からない。

斉藤：はい、読み砕いても、・・。

会長：そういう話は、私と（事前に）電話で話をしよう。この交渉の前に。そうではないか。

斉藤：分かりました。「会長：貴重な時間を無駄にしている」結論から話をする。

会長：それは最初に話をするべきではないか。「斉藤：すみません。」

会長：引き延ばしの話をされたのでは2時間で終わる予定だったが、これでは終わらない。

　無制限でも環境省はこの交渉をしたいと私は受け止めたので、5時まではやろう。

斉藤：じゃあ、やめるか。

会長：自分から分からない、分からないと振って置いて、今のことばはやりたくないのだろう。

斉藤：だから、何で考え方という表現にしたのかと言う処、要綱32条の「会長：32条」32ページ。

会長：事前に電話でやって、お互い事前に確認して、そのうえでこの団体交渉でやろう。

斉藤：・・・。結論は、要綱第1条の解説の部分だ。32Ｐの縦３）（下から3行目）要綱は「これに対する補償額算定の考え方を示したにとどまっている」ということで、要綱を総じてこういう表現をしているということであり、（＊回答書作成者は）ここの部分を見たか、見ないか分からないが、根拠を考え方に置き換えたのではないかなあ‐と。

会長：ないかなあ‐、というのが環境省の回答でよいか。「斉藤：はい」

会長：ないかなあ‐、といういい加減な回答が環境省の回答でよいな。

斉藤：それを私は確認できなかったので、その表現にとどめた。

会長：ないかなあ‐、が、環境省の回答だということは分かった。

斉藤：そう解釈すると分かり易い。

会長：32Ｐの３）だね。それは前回も斉藤氏は話をしたね。（＊前回示したのはＰ32下から6行目の「網羅的にその項目を掲げ、‥示すことは不可能である」部分である）

悪原さん、このような事がないように事前に電話でもメールでも確認したのに（同じようなことを繰り返すとは、）非常に残念だ。

会長：今の話に結論から言うと、まず、日本語としての考え方として期間の概念がないは一般の人に確認したのでも斉藤氏の説明からもこの文書（表現）は間違いだ。「斉藤：頷かず」

一般の人向けには正しいと言ったが（そうでなかったのだ）

斉藤氏にあらためて聞くが、要綱は何のためにできたのか、この解説本は何のためにできたのか。

補償がばらばらだったから専門家にも一般の人にも、いろんな人に分かって貰うために、この本を作ったのではないのか。

斉藤：そうだ。

会長：前回、この解説本は日本のテキストだねと言ったら、斉藤氏も「そうです」と答えた。

「斉藤：はい」なぜ、日本の教科書のことばを使用しないのかと単純に言っているだけだ。

一般の人にも公共事業の推進は大事だから、当会もこの事業に賛成している。

だが、先ほど書いたような憲法違反するような不当な補償を認めるわけにはいかない。閣議決定に反する環境省の土地使用補償「地上権の正常価格」を認めるわけにはいかない。

それは、大熊町、双葉町、福島県のためにも認められない。日本の将来の公共事業の為にも認めるわけにはいかないので、やっているのだ。

会長：要綱の解説書をもち上げて、これは何のために作ったのか。この解説本だ。

斉藤：公共事業を遂行するために社（者）或いは一般の社（者）のために分かり易くするためにだ。

会長：そうだね、分かり易く事業者にも「斉藤：はい」一般の人にも分かり易くするために作ったのだよね。「斉藤：そうだ」これは「斉藤：はい」誰が、「斉藤：そもそも小林さん」だけじゃない。

斉藤：事務局として当時の、然るべくメンバーだ。「会長：然るべくメンバーとは」（この本の）最初の処に書いてある。

会長：だから、（要綱前も要綱後も含めて）用対連の基準から、その答申にいろいろ携わってきた人たちが、作ったのではないか。「斉藤：そうだ」なのに、なんで、この（日本の）教科書に、根拠と書いてあるのを、先ほどの意味不明の説明で話すのは、騙しである。日本語を斉藤さん、一般の人が根拠でなく考え方の方が分かり易いというのは騙しである。

　これは、斉藤氏が言ったようにみんなに理解してもらうために作った本だ。

それで、32Ｐで大雑把に作ったと「斉藤：はい」だから大雑把に作ったのだという理解でよいか。

斉藤：大雑把という表現でなく、こないだ話したように（要綱1条は）大綱だと言った。

会長：これは、斉藤氏の個人的な見解だと言っていたではないか。今日は環境省の見解として持ってきたのか。大綱は。この間要綱1条の目的は大綱（としての表現）だから、何でもできるみたいな趣旨の発言をしたではないか。個人見解か、環境省見解かと聞いたら、私個人の見解だと話したね。

斉藤；はい。

会長：今回は大綱発言がないので、環境省の見解として持ってこなかったと理解していた。

だから今斉藤氏が大綱のことばを出したので、今回は環境省の見解として出したのかと聞いたのだ。

斉藤：そうでございます。

会長：いまのことばは、撤回できませんよ。撤回するなら今撤回したほうがいいですよ。

じゃ、そうですということでいいですね。じゃあ。

斉藤：はい。

会長：この要綱が何でできたのか、大綱、大雑把な言葉、これは細かく32Ｐに書いてあるように、北海道の土地価格から先程話した補償項目の精神的補償から、そういう細かい処まで網羅的に書けないので、まずこれ要綱で示してさらに細かい処は用対連の基準（同細則）で作っていったのだ。

これを待って建設省も内規基準を作っている。それで、（各起業者の内規）基準は（事業ごとに作らず）１つだけである。どこもそうだ。先程の事業が違うからという、環境省の話が、間違っているから、事業ごとには作っていない。

事業が違うからと言ってそれぞれ（事業ごとに）内規基準を作るわけがないではないか。

　前回も斉藤氏はそんな事例（事業が違うごとの内規基準）は知らないと言ったではないか。

これは要綱（土地収用法）の考えから言ったら当然のことである。

要綱32Ｐに戻るが網羅的は鑑定評価の1つ1つを考えて作ることはできないから、（要綱）を作っているのであり、網羅的にできないというのはそういう意味である。

会長：地代又は借賃の補償は明治時代の土地収用法から続いている話なので、網羅的にできない話ではない。「斉藤：頷く」地代と借賃の網羅的にできないのは、北海道の奥で人もいないような土地で取引事例もないような土地に対して、利回りはどうか、とか、参考事例（賃貸）はどうなのかと言ったいろんなことを考えた時に、そこと東京都心の価格とは全く違う訳なので、全部統一して網羅的な計算はできないということでそういうことで、地代又は借賃が出て来るのであって、そのベースの地代又は借賃はずっと変わらず同じである。そこは斉藤氏も頷いて聞いている。

斉藤：何度も頷き、聞く、はい」

会長：一つ一つ細部に亘ることができないから、網羅的にできないと書いているのはそういう事だ。

「Ｓ39年8月1日発行初版本要綱の解説のＳ38年3月の推薦のことば・はしがきの写しを配布」

斉藤氏は要綱の基本的な部分は私と同じだったので、いま、示したのは要綱の解説の初版本だ。

この「推薦のことばとはしがき」に要綱とは（とこの本の目的を）を具体的に書いてある。

この2つが一体となっている。そもそも「要綱」（意）とは「大綱」でなく「物事の根本となる重要なことがら」のことである。

会長：公共事業の重要性から国・国民・土地所有者側の理解と広く有識者の十分な理解を得るために作ったと書いてある。用地補償の行き詰まりも書いてあるが1Ｐ目の推薦のことば7行目を読む「(公共事業)あるいは公益事業の執行者は、同要綱の趣旨を体し、適正かつ統一的な損失の補償を行うことにより、土地所有者側の理解と協力を得て事業の推進を図ることが望まれるのであるが、ここに、同要綱の適切かつ詳細な解説を行った本書が刊行されることは」とある。「斉藤：確認」

会長：アンダーラインを再度読む。初めて見たか。そこを色付けた方がよい。「斉藤：印をつける」

斉藤：過去に見た記憶がある。「会長：記憶にはあるか」1字一句は・・。

会長：1字一句は聞いてない。概要は分かっていたか「斉藤：はい」（＊概要承知で先程の発言か？）

会長：今までの、斉藤氏の話はこの概要に沿っていない。「斉藤：頷かず、同文を見る」

アンダーラインを読む。続けて「事業者の運用上の便宜はもとより、国民各位がその趣旨を理解されるにあたって、資するところ大なるものがある」と書かれている。だから、この要綱を国民にも示せということだ。なんで、要綱と違う言葉で書くのかということだ。国民を馬鹿にしているのかということだ。国民のために（この要綱の解説書）は書いているのだ。

違うか。私の言っていることが間違っていたら、間違っていると言って頂きたい。

斉藤さん、「斉藤:はい。その通りです。」ということは、環境省が間違えているということだよ。

斉藤：・・・。下の資料を触り、下を向いたまま顔を上げない。

会長：次に、「本書の刊行にあたり、事業者あるいはこれらの事業に土地等を提供される諸氏をはじめ広く有識者各位におかれては、」と先程のごね得などの有識者からの批判などを踏まえて有識者も出てきている。「斉藤：何度も大きく、頷く」続いて「この要綱の趣旨を充分にご理解いただき、御尽力ください」と書いてある。

要綱とは、こうゆうことだ。「斉藤：頷く」だから事業者である環境省は、我々地権者から質問が出たときには、テキストであるこの要綱のことばを使って、（地権者・国民に）回答するのが環境省としての責務である。「斉藤：小さく何度も頷く」

会長：根拠のないことを言っているのではない。この要綱とこの解説本は先人・関係者が苦労して血と汗を流して作ったものだ。「斉藤：頷く」

　（斉藤氏は）いま下段の「はしがき」を読んでいるが、斉藤氏は先程から一般の人、一般の人と、言っているが、環境省の話は誰も納得していない。地権者は生活の為に止むを得ず契約をしているだけだ。私の知り合いは、環境省の交渉員に騙されたと思うので、いまなら土地使用契約にすると言っている人が複数人いる。あの時は考える余裕がなかったと言っている。「斉藤：無言」

会長：次小林忠雄氏の「はしがき」にいく。この解説本をまとめた方だ。「斉藤：はい」

同解説書には小林忠雄編とある。

こちらは更に具体的に書いてある。最初は推薦のことばと同じで、9行目「しかしながら、従来往々にして各事業者間の損失補償の項目、内容、手法等に不統一がみられ、」とある。

しかし、地代の支払いは不統一がない、地代の出し方の不統一があるだけだ。続いて「場合によっては適切を欠く補償も・・散見・・このため土地所有者側の不信を招き・・・」と書いてある。

会長：続いて「これらの弊害を除去すべく、・・損失補償の統一（補償項目・算定方法の統一）と適正化を目指して」とある。だから、（要綱19条地代の趣旨に）根拠と書いてあるのだ。

会長：根拠と書いているのは、斉藤氏が長ったらしく話した理由で書いたのではない。

斉藤：何度も頷き、はい。

会長：明治時代から地代と示されているから根拠と書いたのだ。反論があれば話して頂きたい。

斉藤：ございません。

会長：はい、続いて「適正化を目指して、昨年6月・・要綱を閣議決定したのであるが、」とある。閣議決定した内容と違う内容であれば閣議決定をしなければいけない。だが、土地収用法も直さなければいけなくなり、憲法違反になるので出来ない。続いて「同要綱は、その標題からも明らかなごとく」標題は先ほど言った要綱でその意味は根本となる重要な事柄である。斉藤氏が大綱を出したが、その標題は要綱なのだ。物事の根本なのだ。ここまで反論はあるか。

斉藤：ございません。

会長：私が言っているのは間違いでないということでよいか。

斉藤：はい。

会長：じゃあ、環境省が間違えているということでいいね。

斉藤：・・・・。とは言えません。

会長：そこは前回も素直には言えないと言っていた。「斉藤：はい。」

会長：でも私が言っているのは「正しい」と言っている。環境省の間違いを認めているのと同じだ。

まあ、間違いを認めているということだ。

会長：続きにいく。「基準の大綱を示したにとどまり、」ここで大綱が出てきている。続いて「これら損失補償の内容の複雑性もあいまって、」これは地代補償の複雑性でない。続いて「その解釈にあたってはしばしば難解であり、あるいは運用にあたって困惑をきたすところも少なくない」とある。

次にここにおいて、「同要綱の立案、作成を担当し、」に続き斉藤氏こう書いてある「その円滑かつ適正な運用を期待する著者としては、同要綱の趣旨、内容等に関し、」に続き先程の「推薦のことば」では適切かつ詳細な解説だが、内容は同じく、「できるかぎり詳細かつ実務的な解説を行う必要を痛感し、微力ながらその責を果すべく、ここに本書を刊行するに至ったゆえんである」と書いている。

会長：それで、次も「推薦のことば」と同じく「・・関係者各位・・は‥万全の適正を期され・・と共に一般国民各位におかれては、同要綱の趣旨を十分に御理解のうえ・・ご協力を・・を賜れば幸甚」とあり、「本書の意図するところは、まさにこれに尽きるといえる。」と結んでいる。

会長：日本の教科書と言った通り、国民にも有識者にも全ての人に向けて書いた言葉なのだ。

　だから、要綱を守ること（適用すること）が公平なのだ。前回（中間貯蔵施設の中では）土地価格を土地の使用補償額（この場合環境省は地上権の正常価格＝土地使用補償として説明）が超えることは公平ではないといった。そうではない、この要綱を守ることが公平だと書いてある。

斉藤：説明を聞きながら、何度も頷く。

会長：（当会の主張）と同じである。ということは、要綱通りに、要綱19条の地代での適用をやっていない環境省は、公平な補償をしていないということではないのか。

斉藤：・・・35秒・・・。公共事業を行う上での、その補償の在り方についてのルールに基づいた正しい補償だと思っております。

会長：私が説明した事実の内容は最初からその通りだと認めているのに、「斉藤：頷く」最後（だけ）は、環境省は正しいというのは、論理として通っていないのではないか。

斉藤：・・・15秒・・・。

三田：そこはまあ中間貯蔵はその特殊性（従来と同じ繰り返し）「会長：斉藤氏に回答を促す」

斉藤：・・・20秒・・・。前回も話した通り、中間貯蔵事業は選択しなければできない条項もありながら、この要綱に基づいて当然対応する訳ではあるが、例えば長期にわたる地上権の設定による使用は要綱の中には、制定されていなかったので、まあ、それをいわゆる大綱、物事の骨組みだが、まあ、その枠組みにはみ出ない形で、いわゆる要綱20条を準用するような形で、（＊環境省内規基準として）直轄の補償基準を作成し、まあ、この「（＊要綱の）施行について」で、各省庁が制定や改訂することに基づいて、（＊環境省の内規基準の）直轄の補償基準を作成し、ええ、公共事業のまあ、補償のルールに基づいて、基づいた対応をしているというふうに考えている。

会長：そうとしか答えられないのだね。前回も「録画終」話をしたが、今日は私から要綱1条の大綱の話をする予定はなかったが、斉藤氏からだしてきたので話をする。

　各専門家は、大綱は余りにもレベルの低い話で、当初要綱19条を短期のみ対象と主張した以上にひどい話だということだった。（＊要綱19条だけの話から1条の目的全体にレベルを広げ下げた点）

　なので、議論には値しないので、もし環境省の意見として言ってきたら、環境省は初心者以下であり、公共事業をやる資格がないと言っていた。だから、環境省として大綱をだすのなら、標題の要綱なのだ。物事の根本なのだ。

会長：斉藤氏から「はみ出ない形で」との説明があったが、はみ出ているではないか。

はみ出ているよ。なんではみ出ているか分かるか。

斉藤：・・・。

会長：根本がずれているのだ。掲示板に書く

　　　　　「掲示内容以下の通り・冒頭の掲示板の写真の通り」

　　　　　　　要綱19条土地の使用補償　地代は　一活払い共に　一定の期間で

　　　　　　　　土地価格を超える場合　〇　　　超えない場合〇　で共にありだが、

　環境省の地上権の正常価格は　同　上　✖　　　　同　上　　〇で超えない場合だけである。

この通り、要綱19条の地代は一定の期間で年払い・一括払い共に土地価格を超える場合はでてくる。

地上権の正常価格では土地価格を超える場合が出て来るか。「3度繰り返す」

斉藤：・・10秒・・。

会長：通常の土地の補償は超える場合と超えない場合がある。

だから、初めにもこれを掲示板に書いたのだ。地上権の正常価格は超える場合あるか。

斉藤：・・12秒・・。三田：基本はない。

会長：基本でなくありえない。ないではないか。だから根本的に地上権の正常価格は間違えている。土地の使用補償を地上権の正常価格ということ自体が間違えているのだ。だから、（要綱にも書いていないこの）地上権の正常価格はどの事業者もやらないのだ。要綱20条「空間又は地下限定使用」の補償は阻害率でだしている区分地上権ということで地表の地上権の正常価格とは別物である。

まったく、次元の違う話である。斉藤氏はそんなの承知ではないか。

しかも、戦後の収用裁決で一番多いのは送電線の空間使用補償ではないか。

斉藤：・・・。

会長：だったら、土地の使用補償と土地の使用補償は比較できるね。

斉藤：そうですね。

会長：だが、環境省が土地の使用補償と主張している中間貯蔵の地上権の正常価格は比較ができない（＊比較するものではない）と環境省は主張しいるではないか。

斉藤：・・・。

会長：掲示板に土地使用補償の比較を書く。

　　　　「掲示板・冒頭写真の通り」

　　　　　　　土地の使用補償　　　　土地の使用補償　　　　　　　比較できる　　〇

　　　　　　　地上権の正常価格　　　他の土地使用補償　　　　　　比較できない　✖

環境省が比較できない（＊比較するものでない）と言っているではないか。

比較できないのは、土地使用補償ではないのだ。

しかも、掲示板の通り、土地価格を超える場合の片方を否定（✖）している。

そんな土地使用補償などない。これが、斉藤氏の言うはみ出さない形ではない。

はみ出している。掲示板（比較表も含む）を指して明らかにはみ出しているではないか。繰り返す。

斉藤：・・・・・・4分30秒・・・・・・・。

会長：これだけ待っても回答はでないということだ。

斉藤：・・・17秒・・・。

会長：今の続きとして、掲示板に書いた事業が違うという環境省の主張に対しても、土地収用法3条からも要綱からも間違いだとちゃんと説明して、理解頂いている。だから、掲示板の比較表の通り、示したが、（それでも）比較できない、と言っていたが、比較表は仮置き場との比較だ。

斉藤：はい。

会長：比較するものではない、とも、言っていたが、土地使用補償なら土地使用補償で比較できる、ではないか。当たり前の話ではないか。当たり前の話だ。なんで、中間貯蔵だけ比較できないかは、中間貯蔵の「地上権の正常価格」が土地使用補償でないからだ。（＊物権の売買・譲渡税）

　斉藤氏は（後からきたから）気の毒だが、掲示板に張ったＨ25年11月23日付の新聞記事「全面国有地化計画記事（政府関係者の話）」のとおり、すべての間違いは、土地収用法やこの要綱を理解していない政治家が最初、地上権を入れて、その後（環境省の口頭決裁）その正常価格を入れてきたからだ。だから、今迄の交渉者責任者の皆さんは「地上権が入って来た段階で」とか「地上権が決定していたので」とか今斉藤氏も大きく頷いているけど、そうですよ皆さんの責任じゃないのだから。

だが、決まった以上はこの間（黒川氏問題）の閣議決定じゃないけれども、従わざるを得ないからこの団体交渉の場で苦しい弁明をしているのだ。また、斉藤氏は頷いているが。

会長、しかし、お気の毒ではあるが、（間違った補償は日本の公共事業の為によくないので、当会はこれを）糾すために取り組んでおり、お金のためにやっている訳ではない。赤信号はどこまで行っても渡ってはいけない。あの国有地化計画が全ての間違いのもとだ。中間貯蔵事業は30年間なので、土地の使用で進めればよかった。ただ、買ってという希望者には買うよという対応で、それは選択権を与えているのと同じだ。また、斉藤氏は頷いているので、分っているのだ。

会長：で、掲示板の比較表（を指さし）の通り比較できている。ほら、比較表で（仮置き場は）赤で階段のよう（棒グラフ・右肩上がり）になっているではないか。前回、斉藤氏から土地使用補償地代では土地価格を超えるので、売った人と貸した人の間で不公平だとの話がでた。

会長：それを言うなら、環境省の都合のせいで最初の契約者と最後の契約者の5年間同じ補償の方がよほど不公平ではないか。地代にして置けばそんな問題何も起きない。これは地代の額を言っているのではない。地代の年払いであればこの様な不公平の問題はない。

あの比較表では仮置き場の累計地代は見ての通り右肩上がりで、地上権の正常価格は右肩下がりだ。

だが、これも環境省の都合で5年間同じ額だ。途中で訂正したから、赤線で右肩下がりの斜線を加えている。（地代なら）あんな問題は何も発生しないではないか。

斉藤：・・・。

会長：比較表の通り比較できているではないか。

斉藤：・・・。

会長：あの比較表を見てみんなが比較できているといっている。一般の人だ、斉藤さん。

　補償って何ですか。補償の項目とお金ではないか。精神補償は、残地補償は、補償ができるのか、できるとすればその個別の補償額はいくらなのかということではないか。（大きくは）この2つだ。

　比較表で仮置き場と比較して（4年半より少ない30年の補償）あのようになっており、今度は、（仮置き場の6年半で中間貯蔵の）土地価格を超えていくよ。あの比較表と今私が掲示板に書いた内容で説明したが、だから、斉藤氏は答えられないのだ。それは土地収用法と要綱を実務としてやって来たから、答えられないのだ。だから、前の調整官もその前の調整官もお気の毒に体調を崩されたのだ。

会長：私は事実とこれらルールに則ってやっている。だが、（環境省内の）分からない人は、分からないから平気でいろんな勝手なことを言えるのだ。だが、分っている人はつらいのだ。

私も5年間教えて頂き勉強してきたので、皆さんの辛さが分かるようになってきた。

　個人的にはそう思うが、将来の日本の公共事業のためにも、「地上権の正常価格」を要綱19条の土地の使用補償だと認めるわけにはいかない。比較するものでないとの主張は環境省だけだ。

　見た目で比較できているが、この場では、先ほどと同じく（＊間違いを認めるなと言われて来ているから、斉藤氏も）比較できる、とは言えるわけないね。

斉藤：・・・。頷く。

会長：上から比較できないという回答になっているのだから。ね。頷いていただいたが。

　ここで比較できるといえるか。土地使用補償は土地使用補償できる処はいいね。

周辺の仮置き場、大熊町・双葉町が借りている処、ＪＲが借りている処もある。東電が前から借りているところもある。それらも地代はみんな比較できる。だが、比較できないと言っているのは中間貯蔵の中だけだ。その中だけ土地価格と土地の使用補償で比較すると主張しているが、そんな無茶な話は日本国内で通用しない。だから、日本のルールで話をしようと言っているのだ。

斉藤氏はまた、頷いているが、比較できるといえるか。

斉藤：・・・10秒・・・。

会長：頷いては頂いているが、回答を頂けない「斉藤：はい」ので次の話をする。

前回、原発事故後も賃料は変わっていないので（原発事故前の土地価格と賃料は事故後も）100%だが、中間貯蔵の中は土地価格が50%で地上権価格もそれに連動（50%×割合）して下がっている。

それは悪質ではないか。それ分かっていてやったのではないのか。なぜ、仮置き場や仮設焼却場は賃料100%ということは土地価格も100%である。賃料鑑定評価書でもそうなっており、中間貯蔵は50%なのか。前回話したが、説明できるか。

斉藤：・・・。

会長：それぞれの不動産鑑定士の判断だと言う話は、多分斉藤氏はしないと思うが如何か。

斉藤：まあ、鑑定（評価）書を取っていますから。基本はその鑑定評価書でやっている。

会長：私も情報開示請求で見ているので大丈夫それは分かる。

斉藤：ですから、100%の処は原発事故の影響がない、減価する必要がないと不動産鑑定士が判断したから100%にしているのであって、50%にしているのは・・。

会長：私が聞いているのは、何故、環境省はそれを認めたのかと聞いている。不動産鑑定士が、そう考えても、同じ町内か隣の町だよ。そこで、片方が50%で片方が100%なら環境省がおかしいと言わなければおかしいではないか。

斉藤：・・・頷く・・。発言なし。

会長：また頷いて頂いたが、不動産鑑定士がと環境省は言うが、要綱は不動産鑑定士が内容を変えられる訳ではないのだ。それは分かるね。事業者が要綱の内容を変えられる訳ではないのだ。

要綱の条文に沿ってやるのが公平なのだ。不動産鑑定士に聞いたからは、土地価格の微妙な違いがある、又は地代として決めたが、この地代の事例は近傍類似の事例からそぐわないので、こちらの事例を参照とした。それは不動産鑑定士の意見です。それを採用したという説明なら分かる。

そうではないか？

斉藤：頷いて、そうですね。「会長：また、頷いて頂いた有難う」

会長：だが、（50%・100%の）ルールの根本的な処で、不動産鑑定士の意見を聞いたから（だけも含めて）間違いである。（＊環境省としての判断根拠を示すべき）そうではないか、不動産鑑定士は要綱を変えられるか。

斉藤：・・・。

会長：変えられないね。（返事ができないなら）頷いてほしい。「斉藤：頷く」

はい、頷いたので、（これ以上の回答を求めても期待できないので頷きだけで仕方がない）

　それで、（Ｈ29年9月6日環境省回答書の考え方と根拠の話と）期間の概念がない（の一般の方向けに作成した文書だ）の話は初めて聞いた。

　で、この9月6日の回答書は間違えているので、直してほしい。

簡単に言えば（直すのは）要綱19条・基準24条は長期も対象です、とそれだけでよい。

斉藤：・・・・・83秒・・・・・この回答については、まっ、先ほど考え方の話も然り。

会長：間違えていると言う話は理解して聞いたよ。

斉藤：概念の話も先ほど話した通り。

会長：それも間違えていると言う話は理解した。

斉藤：であるので他意があって恣意的に表現を変えたという事ではないので、変えるつもりはない。

会長：いま、他意がないのでと言ったが、結果として間違えているのだから、他意があろうがなかろうがそれは（訂正する、しないとは）関係がない話である。結果として間違えているのだから、直すべきである。いいか、1＋1は2だが、1＋1は3と出した。これは他意があって3にしたのではないので、直さないと言っているのと同じではないか。他意があろうがなかろうが、結論が間違えているのだから、直してほしいと申し入れているのだ。他意がないから直さない話では、それでは世の中は通らないではないか。それが通るのは環境省の中だけではないか。

　（これは）持ち帰ってください。いま答えられでしょ。回答書は本省が作成したと先ほども言っていたのだから。

斉藤：結果的に申しません。

会長：それでは、小泉環境大臣に直接出すことにする。

いま、本省には申しません、「斉藤：はぃ」言わないと言ったのだね。

斉藤：いいえ、（そうではなく）この回答を変えるつもりはございません。

会長：斉藤さん、他意がなくても間違えていれば、直さなければいけないのは人の道でしょ。

　　違いますか。

斉藤：・・・・・。

三田：斉藤の言った通り、考え方で間違えているというよりも・・。

会長：さっきの話で、間違えているではないか。そういうなら、皆さんは、悪いけど頭がおかしい、（それは）日本語が本当に通用しない話だからだ。先程からその通りだと聞いていて、今の話も聞いていて、しかも推薦のことばとはしがきも（直接読んで）聞いて、間違えていますと言っているのに、いま（三田氏がそういうのは、おかしいからそう言った）斉藤氏が、他意がないと言ったのは、やはり、斉藤氏は人間性がある。

斉藤：・・・。

会長：この土地の使用補償の話はこれ以上やっても無理だろうから、だから、持ち帰って頂きたい。

持ち帰らないなら私は小泉環境大臣にだす。今日の話を全部だ。持ち帰るか、持ち帰らないか？

　私はどちらでもよい。いま話した通りだ。持ち帰り検討するかしないか。

斉藤：引き続き検討させて頂きます。

会長：検討するということは分かった。いつ回答を頂けるか。その回答結果によって小泉環境大臣に出す。じゃあ、その回答は速やかに、でよいか。

斉藤：頷く。

会長：斉藤さん、斉藤さんは要綱など詳しいから私と電話でやりましょう。長谷川さん（総括調整官）も斉藤さん（中間貯蔵施設の用地調整官）も日本語が通じます。

斉藤：そうですか。

会長：お互いの立場を超えて、日本の公共事業にためにやりましょう。

そこは大きく頷いて、話の通じる人と話したい。

斉藤：誰と話しても「会長：通じない」必ず私と（室石）所長に伝わってくる。

会長：だめ、だって三田氏と栗田氏とやっても通じない。「斉藤：またまた、そんな事言わないで」

悪原氏の答えはできないという回答は同じだが、行間を読んで人としての受け答えをする。

行間を読んで、行間の中の話をするのはメールではなく交渉や電話である。

　斉藤さんも忙しいから一回の電話で30分以内としますよ。如何か。

斉藤：やっぱり電話ではなくて、「会長：なんで、私も折れるから短くやろう」持ち帰る。

会長：私は代表者だ。本当は所長だ。誰が出ても同じだというのは責任逃れではないか。

　福島市でやらないのは、所長に会わせたくないからではないか。（＊所長が合いたくないからか）私も折れて話をしているのだ。

（環境省が）誠実を持って対応するなら、地権者会の会長の電話を取るくらい当たり前ではないか。

今迄の調整官もみんな私と電話（メールも含めて）直接やり取りをしている。

斉藤：頷く。

会長：頷いて頂いたので電話をします。

「次第２．事業終了に向けて」

(１)福島県外最終処分場の早期場所選定への取り組み

会長：その後、進んでいることはあるか。

三田：福島県外最終処分場は2024年までに基盤移設再生利用の基盤技術を完了する計画で減容化再生利用の量がどの程度かが、大体見えてきた処で、大体2024年以降に県外最終処分場の規模構造などに入っていくという事で、いまは再生利用の実証事業を南相馬市や飯館村でやっており、飯館村では農地造成事業を今年度から実証事業として行っている。

会長：一番難しいのは、いつも話している通り最終処分場の場所選定であるので、易しいことを、最初にやって、難しいことを後回しにすると、結果的にできなかったという言い訳になる。

なので、場所探しの要請をこれからも大熊町・双葉町と一体となって行うのでよろしくお願いする。

三田：はい。

（２）地上権契約書第12条に基づいた返還と原状回復の協議

会長：斉藤氏からも要綱23条の2の土地等の返還に伴う補償の話があった。火災保険は火事が起きときのための万が一のための保険だが、同様に2045年3月12日迄土地を返還してもらうのだが、火災保険と同様に違約金について、環境省から「理解している」と第7回環境書説明会の文書回答だった。地上権契約書12条3項には協議が整わない場合にも契約は終了すると定めた。本来なら、この事前協議は環境省側から言ってくる話だが、当会から言わない限り環境省側からは何も言ってこないのは誠意のない対応である。

　仮置き場の田圃の原状回復時に黒砂を入れており、非常に問題になっている。斉藤氏、田圃（の原状回復）は承知だね。田圃は堤（溜池）と水路と田圃が一体であり、原状回復も同じだ。

当然中間貯蔵施設の中の田圃も同様であり、一体の原状回復をして頂く事が必要である。

だから、山砂など入れないでほしい。いまから申し入れておく。よろしいか。山砂お断り。

　今、（斉藤氏に）頷いて頂いたので、次に進める。

３．「安全・安心の向上対策」

（1）暴走トラックの改善への取り組み

会長：その後進んでいるか。

三田：過年度と比較してより、法令順守も当然だが、マナーを守る特に沿線の方からとういうふうに言われているかというのをドライバーの方に初めの研修だけでなくて、毎年一度研修を受けた方にも、（研修に）来て頂いて且つドライバーの方には事前に同行して、走行して一般の方を優先するような走り方を徹底してお願いをしている。過年度の搬入は400万㎥を搬入するために一日当たり延べ平均で2400台、今年も同じ量を搬入する計画で延べ平均は同じだが、ミラー接触などの事故は過年度に比べて横ばいで、減らしていかなければいけないと思ってさらに取り組みを進めている。

会長：研修は年間一回だけか。

三田：今コロナで研修は分散して実施しており、一人に対して年一回は必ず受ける。

会長：運転手は1000人位はいるということか。

三田：千人くらいはいる。

会長：今も私の処にはトラックについての話が入ってくるが、トラック同士ではミラーの損傷くらいで済むが、（相手が）軽自動車では（歩行者では）はそうはいかないので、引き続き安全への取り組みをよろしくお願いする。

三田：環境省に直接（そのような）話が入った場合は、ドライバーにもその話が伝わるようにして、絶対そのような危険な運転はしないように言っており、これからもしていく。

会長：よろしくお願いする。

三田：はい。

会長：安全研修の密度等、そこは用地補償でないので、三田氏に連絡させて頂くのでお願いする。

（２）コロナ感染防止対策としてトラック運転席へ三田：はい。

の消毒剤の常備

会長：この間は、県外に出てから県内に入ることを話したが、コロナが拡大している現状からは県内外を問わず、運転手のためにでもあるし、環境省のためでもあるので、運転席への消毒剤の常備をお願いする。

三田：承った。

（３）景観優先の建物取り壊しから安全・防犯優先への改善

会長：建物を国道6号線から30ｍで明確に線引きをして建物を取り壊すのは、（建物が半分残る場合もあり、残った建物は、人の侵入や獣の侵入の可能性があり）安全・防犯上危険なので三田氏に、残った建物の取り壊しを要請したが、三田氏はこの間、今年度はやらないということだった。

その後どうなったか。

三田：建物倒壊のリスクが高い処は優先してやった（取り壊した）が、順次取り組んでいる。

会長：今年度を含めた順次か。「三田：いつやるかは今言えない」会長：今年度はできるか。

三田：今年度は難しい。

会長：優先するのは景観でなく、安全・防犯なので、福島県・両町と一体となって申し入れていく。

三田氏は先日の電話では、安全・防犯が優先なのに景観優先の話のようであったので、私と話が、かみ合わなかったので、私は怒ったのだ。

三田：基本は安全・防犯を重視優先するが、それは優先順位を決めてこれからもやって行く。

会長：三田氏が安全・防犯を重視優先するという話は本日分かった。よろしくお願いする。

（４）大雨等での中間貯蔵施設・仮置き場の被害状況と対策

三田：昨日の段階で異常はなかった。

会長：それはよかった。中間貯蔵施設・仮置き場を含めて情報は広くして、対策を行うことが必要である。これからも当会はその姿勢で行うのでよろしくお願いする。

三田：はい。

次第４．クリーンセンターふたばの説明会開催要請「2019年8月5日基本協定書締結」

会長：第7回環境省説明会での環境省回答は貰っているが、協議はどの程度やっているのか。

三田：回数は承知していない。

会長：開催する方向なのか。1年近く経って何もやっていないので、2ｰ3年経ったら稼働する計画なのだ。斉藤氏、一事が万事なのだ。私が言いたいのは、この件は環境省だけの責任ではないが、しかし、我から見れば、双葉地方広域圏組合に話をすれば福島県だ、福島県に話をすれば、環境省だ、この様な目くらまし、と言うか、たらい回しでは、（説明会を開催する）やる気がないと思わざるを得ない。　よろしくお願いする。この件は三田氏にまた来週、連絡する。

５．その他

（１）次回第44回団体交渉の開催日程について

　　来月8月25日（火）26日（水）27日（木）で調整する。

会長：場所は私と副会長が室石所長に会いたいので福島市でお願いする。前回福島市で開催した時も同じだが、室石所長に会いたいので福島市でやることを提案している。持ち帰ってほしい。

　室石所長が私や副会長に会いたくないなら、そう回答してほしい。

（２）次回第8回環境省説明会について

会長：前回長谷川総括調整官と2日に亘り8時間15分電話でさせて頂いたが、9月頃がよろしいか。

結論：副会長からコロナの状況から決めない方がよいとの提案がありその通りとした。以　上3:09:06

【作成2020年8月1-4日40H・見直し8月5日7H　30年中間貯蔵施設地権者会　門馬好春】

後片付けをしながら会長から斉藤氏に旧土地収用法も見ているよ。大島代議士に会いたいね。「完」